

2015年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（長期）
 所属・職・氏名：文学部・教授・楠本 紀代美
 研究課題：ゲルマン系言語、スラブ系言語、および日本語の形式意味論研究
 留学期間：2015年9月1日～2016年8月31日
 留学先：アメリカ合衆国 マサチューセッツ州 アマースト市
 マサチューセッツ大学アマースト校

研究成果概要

マサチューセッツ大学アマースト校、言語学科に籍を置き、以下の研究に取り組んだ。

本研究の大きなテーマは、比較言語学的観点からの時制・相の意味に関する研究である。このテーマは、筆者が博士論文から継続して取り組んでいるものである。世界の言語は「時制の一致」と呼ばれる現象を持つ言語（英語、スペイン語など）とそうでない言語（日本語、ロシア語、ポーランド語、ドイツ語、ヘブライ語、など）がある。この区別は、「言う」「思う」などの命題態度動詞を過去形にした時に、埋め込み節に現れうる時制とその解釈によってなされている。時制の一致のある言語では、過去の主節動詞に過去の状態動詞を埋め込むと（例：John said that he was sick）、言説の内容（病気である状態）が言説時と同時である解釈（＝同時読み）が可能であるが、時制の一致のない言語では不可能であり、同時読みのためには埋め込み節内では現在時制を使用する。しかし、関係詞節や副詞節（特に「の前／後に」などのような時の副詞節）を観察すると、日本語は同時読みの容認可能性について、他の時制に一致のない言語とは異なる振る舞いをするのがわかる。日本語以外の言語では、これらの環境では英語と同じ振る舞いをするが、日本語はどの環境においても時制の一致がないと言える。

またこれとは別に Geis-ambiguity と呼ばれるテスト（John met Bill before he said he would のように、時の副詞節内を埋め込み文にした際に、英語やロシア語では副詞節の解釈に曖昧性が生ずるのに対し、日本語やスペイン語では生じない）による分類がある。この2つの現象を軸にした言語間の差異をどこに求めるかを時制そのものの意味、副詞の意味、副詞節の構造、埋め込み文の構造等様々な観点から研究を進めた。また時の副詞節を研究するにあたり、フレーム副詞と呼ばれる時の副詞（yesterday, last week など）の統語位置、意味解釈、様々な時制との共起可能性などを特に英語、日本語、ロシア語について考察した。この結果、副詞の時の指向性（現在、過去、未来）と時制の指向性が異なる場合の解釈可能性および容認度には、言語間に差異があること、また同じ言語間でも命題態度動詞の埋め込みと関係詞節でもその容認度に差があることがわかった。ここでも、この差異の原因として、副詞の意味の差異、時制の意味の差異、統語構造の差異などが考えられるが、これらについて一つ一つの仮説を検証した。どの言語でも、命題態度動詞の埋め込み節でいわゆる同時読みが可能に際し、埋め込み節に yesterday などの時の副詞を容認しない傾向があるが、同時を表しうる副詞（then, at that time など）の共起可能性には言語間差異や言語内差異が存在する。Geis-ambiguity について日本語と似た振る舞いをするスペイン語や韓国語についても、同様のデータを集め、今後さらなる比較研究をする

必要があると考えている。

上記以外に留学期間中に2つの新しいトピックに関する研究に着手した。1つは、マサチューセッツ大学アマースト校アジア言語学科の名誉教授である北川千里氏やマクギル大学（カナダ）の霜山純子氏と研究に関する面談やメールのやり取りの中から生まれたものである。両者は、主部内在関係詞節（より一般的な主部外在関係詞節「太郎が冷蔵庫に入れておいたりんごを、花子は食べた」に対し「太郎がりんごを冷蔵庫に入れておいたのを、花子は食べた」などのように関係詞節の中に通常の「主語・目的語・動詞」が存在するもの）の研究の第一人者である。この2種類の関係詞節は様々な統語的・意味的側面で異なる振る舞いをするのが知られているが、その1つに關係詞節と主節の時制解釈がある。主部外在型關係詞節では容認される時制解釈が主部内在型關係詞節では容認されない例がいくつか記述的に報告されているが、しかしその差異に説明的な理論が与えられているとは言い難い状況である。英語、日本語、ロシア語の時制解釈の相違を統語構造の違いから説明できたことから、日本語内の主部外在型關係詞節 vs 主部内在型關係詞節の相違も、この2つの關係詞節の構造の違いから説明できるのではないかと考えている。主部外在型關係詞節は、名詞の修飾節として働き、意味的には名詞の解釈に依存するが、主部内在型關係詞節は主節とは独立した構造を持ち、修飾関係は一部語用論的に決定されると考えると、その時制解釈が主節とはある程度独立したものであること、言い換えると主節の時制を基準時制とする解釈が生じにくいことが予想される。

もう1つは、埋め込み節の補文標識（thatのように当該文が補文であることを示す文法様式）と意味に関する研究である。これは Angelika Kratzer 氏のセミナーでの講義に端を発している。think や say などの命題態度に後続する that-節はこれらの動詞の補部であるというのが定説であったが、近年これらを意味的には付加部であると捉える理論が提案され、これに対する経験的証拠も認められている。例えば英語の explain は that-節をとるときと wh-節をとるときとで意味が異なるが、このことは後者の理論でよりよく説明できるとされている。英語には、that-節と wh-節の2種類の補部しかないが、日本語には that-節に相当すると考えられる「〜と」と wh-節に相当する「〜か」以外にも、「〜のを」「〜ことを」「〜かと」「〜のかと」などの補部形態がある。この一部については、統語的観点からの先行研究はあるが、形式意味論的研究は少ない。一般に that-節は命題（世界の集合）を表し、wh-節は命題の集合を表す、つまり意味のタイプが異なるとされているが、この意味の差異を作り出すものが that や wh そのものであれば、両方の補部を容認する know などの事実動詞や上記の explain などの振る舞いを説明することが困難だけでなく、that-節内に wh が現れるのと同様の「〜かと」の意味を「か」と「と」の意味から合成することは不可能に思われる。しかし日本語の「〜かと」と同様、that-節に相当する補部の中に wh-節を埋め込む構文はスペイン語やイタリア語にも観察されることから、統一的なメカニズムがあると考えの方が妥当である。これらの比較研究により、英語のみではわからなかった命題態度動詞の補文標識と意味との関係が明らかにできると考えている。

最後に、自身の研究以外の活動は以下の通りである。秋学期は Seth Cable 教授の意味論セミナー “Semantic Variation in Tense and Aspect”、春学期は Angelika Kratzer 教授の意味論セミナー “Speech and Attitude Reports” および Kyle Johnson 教授の統語論セミナー “Movement” を聴講した。また1年を通じ、コロキウム（外部からの招聘講演）、意味論ワークショップや意味論／統語論リ

ーディンググループ（院生主体のインフォーマルな発表やディスカッション）に出席、またカナダ・モントリオールで開催された North East Linguistic Society やマサチューセッツ大学アマースト校で開催された Turkish, Turkic and the Languages of Turkey や Workshop on Theoretical and Experimental Approaches to Agreement などの学会にも参加した。

19名の教員、30名程度の大学院生、10名程度のビジターと様々な機会を通じ交流することができ、様々な知見を得ることが出来た。特にインプットの面での収穫が大きく、貴重な機会であった。